

自分の思いを伝える手紙を書く

仮定・想定ではなく実体験で

強い相手意識をもって書く活動を行わせるためには、「生きた場」の設定が欠かせません。生徒に対し、「今の自分の思いを一番伝えたい人に手紙で書いてみよう」と提示することで、生徒の相手意識は格段に高くなります。

例えば、小学校の先生に手紙を書く場合、目上の人への手紙の書き方として、改まった手紙の形式、敬語の使い方等が、生徒の意識に上ることになるでしょう。想定された学習であれば、学習の時期に左右されず指導しやすい面はありますが、生徒の強い思いは出てきません。結果的に、相手に自分の思いを伝える手紙を書くことはできません。やはり、生徒がその学習活動の必然性を実感できるリアリティのある題材と場を設定することが重要です。

国語のどんな力をつけようとしているのか

本実践において生徒に身に付けさせたい力は、概念的な言葉ではなく、自分の思いの広さ、豊かさ、深さを具体的な言葉で表現できる力です。

こんな表現ができれば、おおむね満足できる状態として、以下のことが挙げられます。

うれしさ	・とても勇気が出ました ・思わず口ずさんでしまいました ・心がおどるようでした
感謝	・いつまでも忘れることはない ・胸に刻みががんばっています ・今もあたたかく心に響いています
楽しさ	・時の経つのを忘れるほどでした ・充実した時間を過ごすことができました

各時間に手だてをちりばめて

時間	主な学習活動	手だて
1	学習のねらいを把握し、感動体験を確定する。	○ 発問 「今まで手紙を書いたことがあるか」「感動した心を伝える手紙を書いたことがあるか」「どんなことを通して、どんな心をだれに伝えるのか」
2 3	ノートに下書きを書いていく。	○「この言葉では、自分の言いたいことにピタッとあてはまっていない。もっと他に違う言葉はないか。どう表現すればいいのか」 ○ 類語辞典を使わせる。生徒対教師の相談タイムを設ける。 ○「自分の伝えたい感動が表現しきれているか」という観点から、書いたものを読み返し、一つのことに絞って推敲させる。
4	便箋に清書をする。	○時候のあいさつは、自分の身の回りで発見したことを自分のオリジナルで書かせる。 ○文字は心を込めて書かせる。 ○自分の思いを込めた手紙を完成させ、相手に届ける。